

阿部山遺跡群出土馬具の再検討

長谷川 透

I. はじめに

阿部山遺跡群は、キトラ古墳の南方にある大字阿部山集落の南側に広がる遺跡である。阿部山遺跡群の南に隣接して明日香村と高取町の境界には、石敷や大壁建物が検出されたホラント遺跡がある。阿部山遺跡群の西側には、大壁建物やオンドル遺構が見つかった観覚寺遺跡をはじめ、銀釧や銀匙、カマドが出土した5世紀代の稲村山古墳がある。観覚寺地域にはこのほか、坂ノ山古墳から銀釧やミニチュア炊飯具が出土し、飛鳥西南部を中心に檜隈地域から高取町にかけて渡来系要素を示す遺構・遺物が近年顕著に認められている。

明日香村教育委員会は、平成21年度からキトラ古墳の南方に広がる丘陵地域の性格を明らかにすることを目的として、阿部山遺跡群の範囲確認調査を実施した。この範囲確認調査では、丘陵上でカイワラ1・2号墳を検出し、鉄製馬具をはじめミニチュア炊飯具や銀釧が出土した。この出土遺物の様相は、渡来系要素を示す遺物群であり、阿部山遺跡群の性格を検討する上で貴重な資料を提供した。なかでも、鉄製馬具は、轡が鉄製楕円形鏡板付轡であり、辻金具、吊金具、鉸具がセットで確認できたのは飛鳥では初例であった。よって、本稿では、奈良県で出土した鉄製楕円形鏡板付轡と阿部山遺跡群出土馬具の比較検討を行い、阿部山遺跡群の位置付けについてあらためて検討してみたい。

II. 阿部山遺跡群の調査

阿部山遺跡群は、高取山から派生する東から方向に延びる舌状尾根と小支谷からなる起伏の激

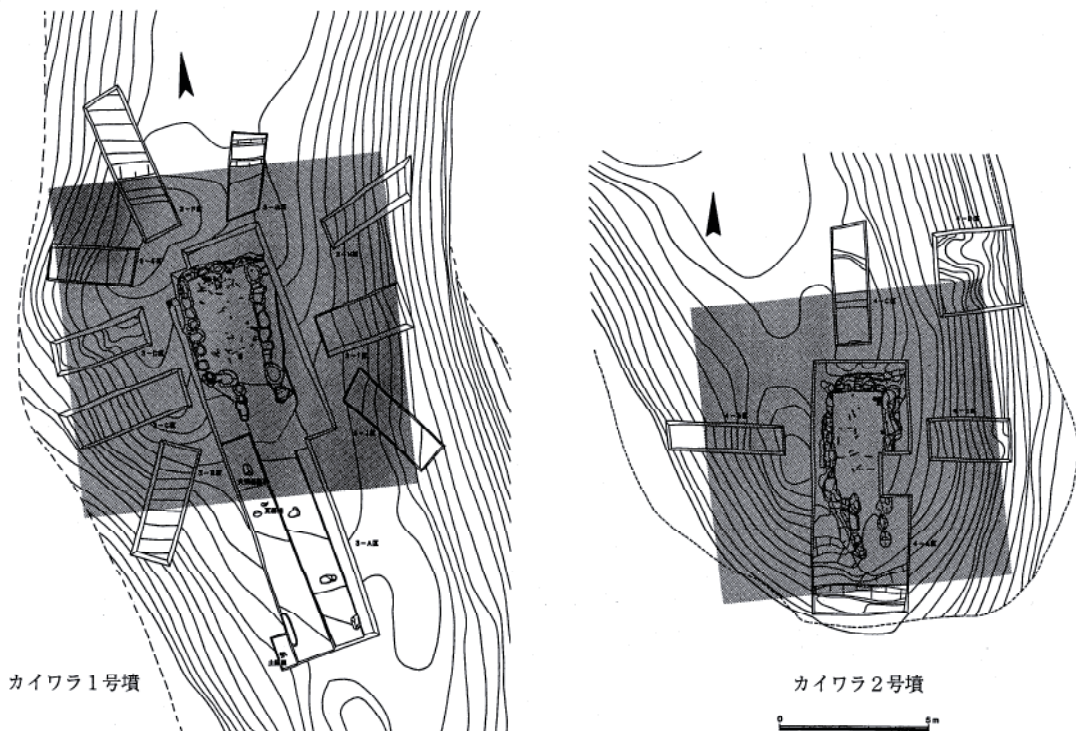


第1図 阿部山遺跡群位置図 (1:25000)

しいところに立地する。このような地形のためか、当地域は大きな開発も少なく、旧地形が良好な状態で維持され、尾根に挟まれた小支谷は棚田状の景観をなしている。

この阿部山地域は、これまでの奈良県遺跡地図においても、ほとんど遺跡の分布が見られないとされてきた。2001年、阿部山地内の圃場整備事業の計画に伴い、整備予定地の畑地や山林の踏査が行われた。この踏査によって、古墳状隆起や飛鳥～室町時代の土器の散布、中・近世墓が確認され、阿部山地域にも広く全時代を通して遺跡が分布していることが喚起された。

明日香村教育委員会は、平成21年度からキトラ古墳の南方に広がる丘陵地域の性格を明らかにすることを目的として、丘陵部を中心に範囲確認調査を実施した。この調査によって、横穴式石室2基や木棺直葬墓が確認された。これらの古墳は、盗掘等によって大半が失われていたものの、石室内では鉄釘や馬具、銀釧、ミニチュア炊飯具などが出土した。この2基の古墳は小字名をとり、北側をカイワラ1号墳、南側をカイワラ2号墳と命名された（村概報21年度）。



第2図 カイワラ1号・2号墳平面図（1：250）

カイワラ1・2号墳

1・2号墳は、高取山から派生した尾根筋からさらに南北に延びる丘陵上に位置する。1号墳は、墳丘は地山を削り出したうえ、盛土整形する。墳丘規模は、溝や地形の落ち込みから一辺約11mの方墳に復元される。墓壙は東西約3m、南北約6.2mを測り、埋葬施設が南に開口する右片袖の横穴式石室である。石室の大半は石取りにより失われているが、基底石がわずかに残る。石室規模は、復元して玄室長3.2m、玄室幅1.8m、羨道長1.7m、羨道幅0.9mを測り、石室全長は5m以上である。石室内から土師器、須恵器、ミニチュア炊飯具、鉄釘、馬具、銀釧が出土した。鉄釘が26本以上出土したことから、木棺が二棺分想定される。

2号墳は、1号墳の南、丘陵頂部からやや下ったところに位置する。墳丘は地山削り出しで、墳丘コーナー残存部から、一辺約10mの方墳に復元される。埋葬施設は、石室の大半は石取りのために失われているが、南に開口する横穴式石室である。石室の奥壁と西壁のコーナー部に

基底石が2段残存する。石室規模は、基底石と抜き取り痕跡から、玄室長3.5m以上、玄室長1.7m、羨道長2m以上、羨道幅0.7m、石室全長5.5m以上となる。石室内から土師器、須恵器、ミニチュア炊飯具、鉄釘、馬具が出土した。

カイワラ1・2号墳では、渡来系要素が認められるミニチュア炊飯具や銀釧などが出土することから、阿部山地内にも渡来系と人々の墓域が広がっていたことが想定される。周辺地区の調査成果とミニチュア炊飯具の様相からみて、カイワラ1・2号墳は、6世紀中頃から後半と考えられた(村概報21年度)。

Ⅲ. 阿部山遺跡群出土馬具

カイワラ1号墳出土馬具

1号墳では、轡、辻金具、吊金具、鉸具が出土した。馬具の大半は、玄室北部で検出された。轡は鉄製で、鏡板、銜、引手がある。鏡板は、半分近くが欠損しているが、面取りした周縁部が緩い弧を描く。下辺部はそのまま直線部を残すが、上辺は破損しており、立聞部分は不明である。周縁が隅丸長方形ないし楕円形を呈していることから、楕円形鏡板と考えられる。

銜は、5mm方形の鉄棒の先端部に環をつくり、そこに別の環が連結する。鉄棒部は比較的形状を残すが、環の連結部は互いに銹着している。長い鉄棒部が引手で、鑄着した別の環が銜先環か遊環と考えられる。

引手は、5mm方形の鉄棒の先端に、直角に取り付く引手壺を設ける。

辻金具には、爪形金具と責金具、方形金具がある。

爪形金具は、平面が爪形をした鉄製金具で、いずれも径5mmの鉾を3点打ちこむ。計10点出土し、そのうち4点には責金具が残存する。爪形金具は大小で二種に分類でき、幅1.5cmが5点、幅2.0cmが5点である。責金具は幅1.9～2.0cmで、両端を折り曲げた鉄製金具である。幅1mmの斜め方向の刻みが一部残っている。方形金具は、一辺1.9～2.0cmの鉄板の四隅に鉾を4点打ち込む。計3点ある。責金具と同じ長さであり、爪形金具が四方に取りつくのであろう。

吊金具は幅1.9cmの長方板の下辺にU字に屈曲した金具が取りつく。長方板の上部は欠損しているが、本来はもう少し長いと考えられる。長方板の残存部で鉾が3点確認できる。轡に取り付くと考えられる。

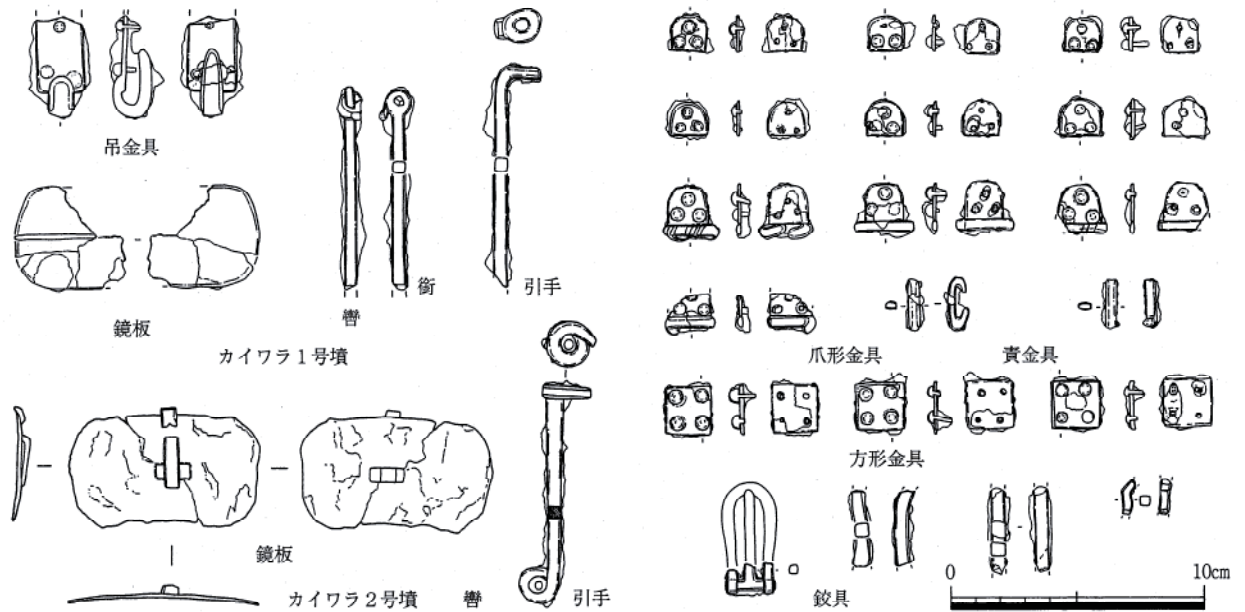
鉸具は、輪金両端にT字の刺金を嵌めこむ。輪金部の断面形は方形である。

カイワラ2号墳出土馬具

轡のみ出土した。轡は鏡板1点、引手1点である。

鏡板は、幅7.5cm、厚さ1～2mmの鉄板で、側縁を円弧状にし、上縁は直線状をなす。下縁はわずかに弧状の削り込みがある。中央には縦7mm、横1.4cm大に切りぬいた横方向の銜通孔がある。この銜通孔に直交するように幅5mm、長さ2cmの銜留金具を取り付ける。銜留金具は両端を曲げ、鏡板にホッチキス状に差し込んでいる。鏡板上辺中央には、立聞孔を穿ち、吊金具を差し込む。

引手は、一辺5mmの鉄棒からつくる一本引手である。引手壺は直角に屈曲するくの字形である。引手壺の環は反時計まわりに一回巻きつける。轡側の環も同様にわらび手のように曲がる。長さは全長で8.6cmを測る。



第3図 阿部山遺跡群(カイワラ1・2号墳)出土馬具(1:3)

IV. 奈良県出土の鉄製楕円形鏡板

奈良県出土の鉄製楕円形鏡板付轡について取り上げたい。楕円形鏡板は個体差が大きいが、本稿では、鏡板が鉄製で、形状が横長楕円形であり、下辺を弧状に刳り込むものも取り上げる。鉄製楕円形鏡板付轡は集成が試みられ、宮崎県から茨城県に至る広範な地域で確認されている。

奈良県内でも、鉄製楕円形鏡板付轡の集成がなされている。これによると、奈良県で確認されている鉄製楕円形鏡板付轡は、橿原市新沢千塚古墳群や御所市巨勢山古墳群、葛城市寺口忍海古墳群など南葛城郡に集中し、その多くが中小規模の古墳で出土するとされる(鹿野1987)。この轡には、5世紀代には剣菱形杏葉を伴うが、それ以降は辻金具や鉸具と構成された簡素な馬具セットであった(鹿野1987)。そして、鉄製楕円形鏡板付轡の年代は、5世紀後半から6世紀中葉に認められる(坂本1985、鹿野1987)。鉄製楕円形鏡板付轡を副葬する古墳は、f字形鏡板付轡出土古墳と比べて階層差があるとされ、前者を後者より下位に位置づけている(木許1994、坂本1996、植田1999)。

以下、奈良県内の鉄製楕円形鏡板付轡についてまとめてみたい。

出土古墳事例

新沢千塚112号墳 直径約16m、高さ2.7mの円墳である。埋葬施設は木棺直葬墓で、箱形木棺を直葬する。出土した須恵器から5世紀末葉を前後する時期と考えられる。副葬品の多い一群の古墳であることから、盟首級の被葬者が想定されている(檀考研1981)。

轡は、楕円形鏡板付轡で、鏡板は楕円形に近い長径12cm、短径7cmの鉄板で、全面に黒漆を塗る。上辺には方形の立聞がつき、立聞孔には幅2cmの吊金具がつく。鏡板中央には2孔あけた銜通孔がつく。引手は鏡板の外側で小遊環と連結して銜につく。引手先には別造りの引手壺が取りつく。

新沢千塚312号墳 直径18m、高さ3.5mの円墳である。埋葬施設は、粘土槨に割竹形木棺である。出土した須恵器から時期が6世紀前半頃と推定される(檀考研1981)。馬具は、木棺小口板

の外側で出土した。楕円形鏡板は長楕円形を呈し、下辺に若干の削り込みをいれる。鏡板は長径11.8cm、短径は6.5cmを測り、上辺には立間を設ける。鏡板外面には黒漆を塗り、中央には銜先環を連結するための円孔が2孔認められる。引手は鏡板の外側で遊環を連結させて銜先環に取りつく。

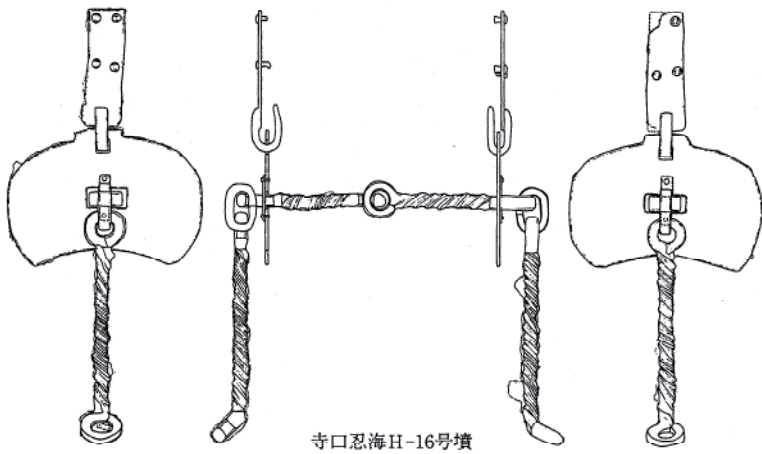
忍坂4号墳 直径14m、高さ約2mの円墳である。埋葬施設は木棺直葬墓で、木棺は組合式木棺である。馬具は木棺小口板の右外側で出土した。忍坂支群の後期古墳では最も古く、横穴式石室に移行する直前の木棺直葬墓で、時期は6世紀前半と考えられる（榎考研1978）。馬具は轡のみ出土し、楕円形鉄板の長径が11.4cmを測る。鉄板の周縁には装飾とみられる鋸が打たれる。上辺には方形の立間を設け、兵庫鎖が遺存する。下辺には幅5cmと弧状の削り込みがある。鏡板中央には横長方形の銜通孔があり、銜留金具が銜通孔に直交して取りつくともみられる。引手先には別造りの引手壺が連結する。引手は銜先環とは直接連結せず、鏡板の外側で8の字状とみられる遊環とつながれる。

寺口忍海D-27号墳（平岡西方E-27号墳） 直径16.5m、高さ約4mの円墳に、方形の張り出し部を設ける。埋葬施設は、南に開口する右片袖の横穴式石室である。27号墳は5世紀末から6世紀初頭に築造され、立地や副葬品から盟首的な古墳に位置付けられる（新庄町・奈良県1988）。馬具は石室袖部で出土した。鉄製楕円形鏡板付轡は、鏡板の外側で引手が遊環を介して銜に連結するものである。鏡板は、下辺を弧状に削り込んだ楕円形鏡板で、全面黒漆が塗布された。鏡板長径は10.7～11.1cmを測る。鏡板中央には銜先環を通す角孔が2か所ある。上辺には立間が設けられ、その先には黒漆の塗られた吊金具が取り付けく。

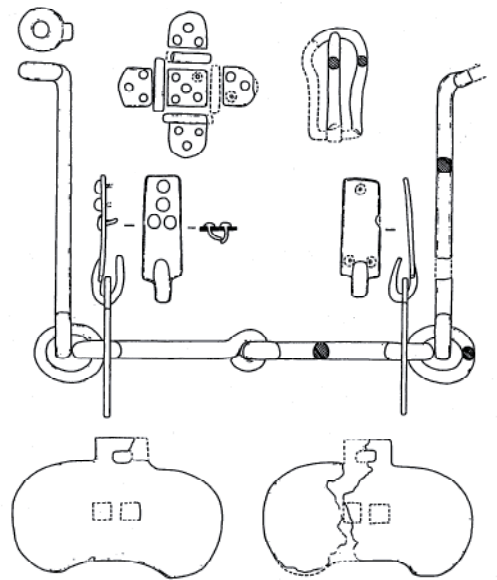
寺口忍海H-16号墳（平岡西方H-12号墳） 10m以上の規模をもつ古墳である。埋葬施設はほぼ南に開口する無袖式の横穴式石室である。馬具は奥壁の西隅部で出土した（新庄町・奈良県1988）。鉄製楕円形鏡板付轡は引手が鏡板の外側で遊環を介して連結する。楕円形鏡板は下辺が弧状に削り込みが入り、上辺には立間が設けられる。鏡板の規模は長径12.7～12.9cm、高さ8.8～9.1cmを測る。鏡板中央には銜留孔が横方向に穿たれ、それに直交して銜留金具が取り付けられる。銜留金具は上下端を鋸留めされる。銜は二連式で、断面形が方形の鉄棒を振る。引手も銜と同様に断面方形の鉄棒を振っている。立間には方孔が穿たれ、吊金具が取り付けく。

遺跡名	所在地	墳形	埋葬施設	共伴出土遺物	出土馬具	時期
阿部山遺跡群 (カイワラ1号墳)	明日香村	方墳	横穴式石室	土師器、須恵器、ミニチュア炊飯具、鉄釘、銀釧	轡、辻金具、吊金具、鉸具	6世紀中頃～後半
阿部山遺跡群 (カイワラ2号墳)	明日香村	方墳	横穴式石室	須恵器、ミニチュア炊飯具、鉄釘	轡	〃
新沢112号墳	橿原市	円墳	木棺直葬墓	須恵器、鹿角装大刀、鉄刀、刀子、矛、鉄鏃、鉋、鏃、釘、滑石製白玉	轡、辻金具、吊金具、鉸具、輪鏡	5世紀末
新沢312号墳	橿原市	円墳	粘土槨	須恵器、直刀、刀子、鉄鋌状品、鏡、銀環、管玉、ガラス玉	轡、辻金具、鉸具	6世紀前半
忍坂4号墳	桜井市	円墳	木棺直葬墓	須恵器、鉄鏃、鉄鎌	轡	6世紀前半
寺口忍海D-27号墳 (平岡西方E-27号墳)	葛城市	円墳	横穴式石室	土師器、須恵器、大刀、剣、矛、鹿角装刀子、鉄釘、鉄鎌、鑿、鉸、鉄斧、滑石製紡錘車、ガラス玉	轡、辻金具、鉸具	5世紀末～6世紀初
寺口忍海H-16号墳 (平岡西方H-12号墳)	葛城市	円墳	横穴式石室	土師器、須恵器、鉄刀、刀子、鉄鏃、鉄釘、砥石、鋤先、鉄斧、鉋、鑿、鉄鉗、鉄鎚、耳環	轡	5世紀末～6世紀初
芝塚2号墳	葛城市	円墳	横穴式石室	須恵器、鉄刀、鉄鏃、農工具、耳環、不明銀製品、銀製空玉、石製玉類、ガラス玉	轡、杏葉、辻金具、雲珠	6世紀前半
巨勢山境谷8号墳	御所市	円墳	横穴式石室	須恵器、鉄鏃、鉄釘	轡	6世紀初

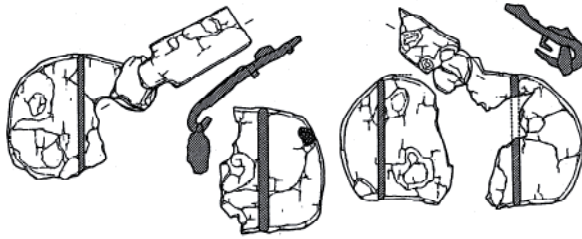
表1 奈良県の鉄製楕円形鏡板付轡出土古墳一覧



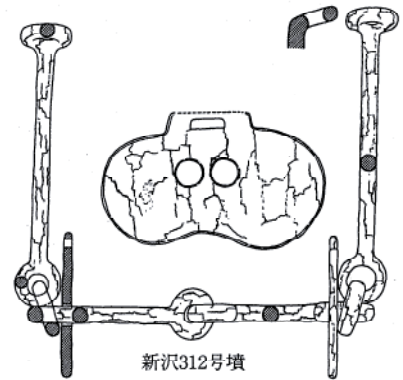
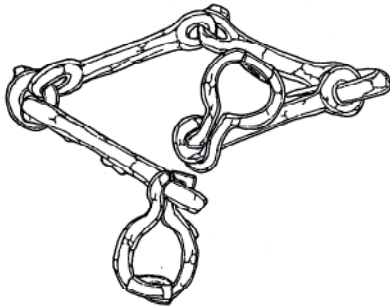
寺口忍海H-16号墳



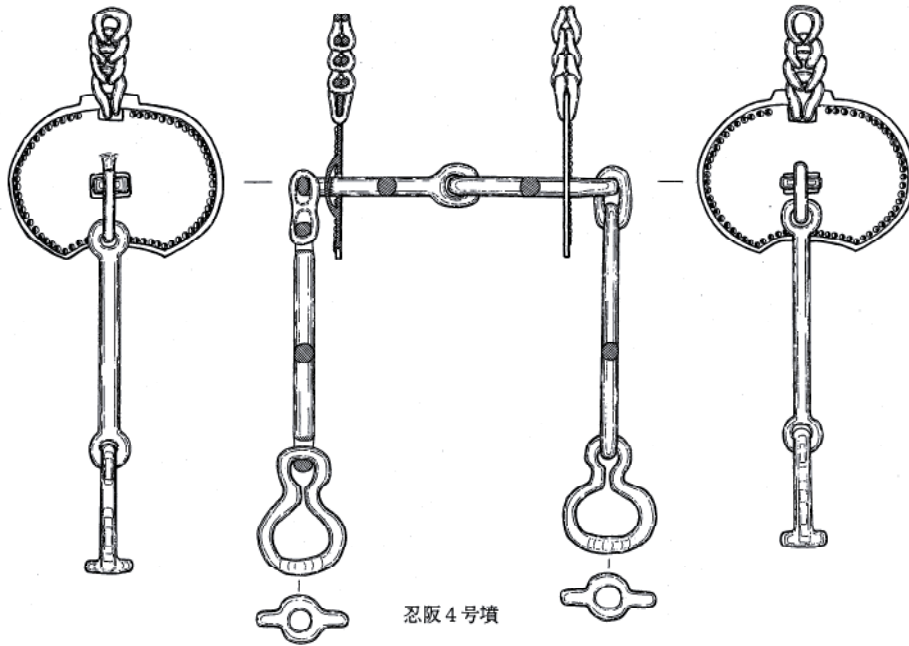
寺口忍海D-27号墳



新沢112号墳



新沢312号墳



忍阪4号墳



第4図 奈良県における鉄製楕円形鏡板付轡（1：4）
各報告書より転載

奈良県内の鉄製楕円形鏡板付轡の特徴

楕円形鏡板の長径が11～12cmの楕円形で、いずれも立聞を設けている。立聞からの吊金具は忍坂4号墳のみが兵庫鎖で、それ以外は鉾留の長方形吊金具である。別造りの引手壺が取り付くのは忍坂4号墳と新沢112号墳のみで、それ以外は屈曲の強い「く」の字形引手となる。鏡板中央に鉾留金具を取り付ける例が忍坂4号墳と寺口忍海H-16号墳で、それ以外は方孔もしくは円孔を穿つ。忍坂4号墳については、鏡板周縁に鉾を打つほか、立聞が兵庫鎖を採用するなど特異な様相を示しており、他の馬具の影響と考えられる。

いずれも馬装は方形金具に爪形金具で構成された辻金具をもち、芝塚古墳を除き杏葉はもたない。これまで、鉄製楕円形鏡板付轡は装飾性の乏しい馬装といわれているが、奈良県内においても同様である。時期は、およそ5世紀末から6世紀前半に集中しており、全国をみても5世紀後半から6世紀前半という位置づけの範疇に収まっている。出土古墳群の様相は渡来系の群集墳と認めることができる。しかし、この馬具と共伴して直接渡来系を示す遺物が出土していない。鉄製楕円形鏡板付轡が渡来系要素とは別に所有されていた可能性が考えられる。ただ、鉄製楕円形鏡板付轡を所有する古墳はいずれも立地や副葬品から盟首墳級に副葬されている。

V. 阿部山遺跡群馬具との比較

阿部山遺跡群（カイワラ1・2号墳）の鉄製楕円形鏡板付轡は、奈良県内の出土事例と比較してみると、鏡板の大きさが小型であるのが特徴的である。また、引手も屈曲の強い「く」の字状引手である。馬装は杏葉をもたず、奈良県内の出土事例と比較してみても同様な馬装であるといえる。カイワラ1・2号墳は、ミニチュア炊飯具や隣接して検出した木棺墓から6世紀中頃～後半とされているが（村概報21年度）、他の鉄製楕円形鏡板付轡出土古墳の年代観と比較すると、年代的に新しく位置付けられる。しかし、この隣接する木棺墓の出土須恵器は、比較的古い様相を残しており、木棺墓の年代をもう一段階古くみて考えるならば、カイワラ1・2号墳を少し古く考えることもできる。ミニチュア炊飯具についても、個体差も著しく、型式学的な変遷と年代観はまだ検討の余地が残されており、時期を特定するには課題が残る。ただ、馬具についても、伝世などによって製作年代と副葬時期が異なることがあり、馬具の年代観がそのまま副葬時期を示すのかどうか、個別に検討していかなければならない。今回、カイワラ1・2号墳では副葬年代を示す遺物が少ないこともあるが、これまでの奈良県内の鉄製楕円形鏡板付轡の出土事例からみて、カイワラ1・2号墳が6世紀前半代に位置付けられる可能性を示しておきたい。

奈良県内において、鉄製楕円形鏡板付轡を所有する古墳が、渡来系を示す古墳群に所在することが多いといえる。しかし、カイワラ1・2号墳のようにミニチュア炊飯具や銀釧といった直接渡来系を示す遺物とこの轡とが同一古墳のなかで共伴する例が他にみられない。この轡をもつ馬装は直接渡来系を示すものではなく、被葬者集団が所有していた可能性が考えられる。鉄製楕円形鏡板の馬具セットは基本的な組み合わせとして、辻金具のみの簡素な馬装であり、それがセットとして配布されていたと考えられる。鉄製楕円形鏡板付轡を所有する古墳がいずれも盟首墳級であり、古墳群において木棺直葬から横穴式石室へ変化する画期、およそ5世紀末から6世紀前半に集中して出土する。このことから、古墳群のなかでも新たに台頭した家父長層に配布・所有された馬装であったと考えられる。

VI. まとめ

奈良県出土の鉄製楕円形鏡板付轡の事例と比較しながら、阿部山遺跡群出土の馬具について再検討をおこなった。奈良県内の鉄製楕円形鏡板付轡との比較・検討によって、阿部山遺跡群出土の馬具が6世紀前半まで遡る可能性を指摘することができた。カイワラ1・2号墳に見られる古墳の様相は、近隣の稲村山古墳や坂ノ山古墳と時期も近接し、副葬品の様相も類似する。当地域は、古墳時代中期以降、大壁建物やオンドル遺構などが集中的に分布し、渡来系の集落が認められる地域である。飛鳥前代において、明日香村阿部山から高取町観音寺一帯は、渡来系の色彩が強く、当地域が渡来系の被葬者集団の墓域であったと推測される。当地域の古墳群は、貝吹山南麓の真弓・与楽古墳群や飛鳥盆地の東方にある細川谷古墳群といった渡来人の奥津城と分布を異にしなが、時期的に近接した関係にある。これらの古墳群にみられる属性を抽出し、詳細に検討することによって、飛鳥前代における氏族の動向を探ることが可能となるだろう。

本稿を成すにあたって、相原嘉之・西光慎治・高橋幸治・辰巳俊輔の各氏から調査成果や研究成果などのご教示・ご指導を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

参考文献

- 明日香村教育委員会2010 『明日香村遺跡調査概報 平成20年度』
明日香村教育委員会2011 『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』
植田隆司1999 「内彎楕円形鏡板付轡の馬装」『龍谷史壇』第111号
木許 守1994 「巨勢山75号墳出土の馬具－出土馬具が語るもの－」『大和を掘るXIV－1993年度発掘調査速報展』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
坂本美夫1985 『考古学ライブラリー 34 馬具』ニューサイエンス社
坂本美夫1996 「剣菱形杏葉の分布とその背景」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念論文集
坂本美夫1996 「剣菱形杏葉の階層性とその背景」『研究紀要』12 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
坂本美夫1997 「鉄製楕円形鏡板付轡の分布とその特性」『立正史学』第81号
鹿野吉則1987 「大和における馬具の様相－鉄製楕円形鏡板付轡を中心に－」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ
白澤 崇1999 「鉄製楕円形鏡板付轡とその馬装」『石ノ形古墳』袋井市教育委員会
新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所1988 『寺口忍海古墳群』
新庄町教育委員会1985 『平岡（西方）古墳群－第2次発掘調査概報－』
奈良県教育委員会1974 『大和巨勢山古墳群（境谷支群）－昭和48年度発掘調査概報－』
奈良県立橿原考古学研究所1978 『桜井市外鎌山北麓古墳群』
奈良県立橿原考古学研究所1981 『新沢千塚古墳群』
奈良県立橿原考古学研究所1986 「芝塚古墳群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）』1985年度
花谷 浩1991 「馬具－日本出土鉄製鏡板付轡に関する覚え書き」『川上・丸井古墳発掘調査報告書』長尾町教育委員会